

音楽科授業構成の再構築 ～題材を越えて～

伊 野 義 博*・池 田 芳 幸**

Reconsidering on The Construction of Music Lessons in School

Yoshihiro INO* and Yoshiyuki IKEDA**

I 研究の経過

本研究は、これまで音楽の授業を構成する際の基本的な単位とされてきた「題材」及び題材を核とした授業構成のあり方について検討すると同時に、音楽科に求められている現代的な課題を整理しながら、これからの音楽科における授業構成の方法を探る一連の共同研究である¹⁾。

学校教育における音楽の授業は、従来「題材」を設定し、これらを系統的、発展的に指導計画の中に位置付けながら実践されるものとされてきた。ここでいう「題材」とは、「学習指導のための目標、内容を位置付けた指導の単位」²⁾であり「指導目標、指導内容、指導計画、指導過程、教材、評価などの諸要素から構成」される³⁾。授業者は、それぞれの授業ごとにこうした意味での題材を設定しながら、実践をしていくわけである。しかしながら、題材の設定においては、いくつかの問題点が顕在し、題材による授業構成は硬直化する傾向にあると思われる。この問題点は先の研究⁴⁾において次の5点に整理された。すなわち、

- ・学習指導要領における「内容」が、「表現・鑑賞」といった「活動」の「領域」として区分されていることにより、授業者が「内容」と「活動」と「領域」と直結して捉え、しばしば混同させてしまうこと。
- ・学習指導要領の「内容」が、西洋芸術音楽の体系において作曲された楽曲の解釈や表現を前提とした記述が中心となっているため、その観点にたった「表現」や「鑑賞」の学習といった題材発想の傾向があること⁵⁾。
- ・現行の題材の性格が、教える側の願いや指導の意味合いが強く「学習者の意志や働きかけ」といった視点が不足していること。また、「主題による題材構成」「楽曲による題材構成」とも、系統性・発展性において困難が内在していること。
- ・教科用図書の主題構成は系統性、発展性を強く意識したものであるものの、それらが学習指導要領の内容の多くと深く関わるように構成されているため、結局は楽曲の「表現」や「活動」を通して、学習指導要領の内容を指導することに落ち着いてしまう傾向が見られること。

*新潟大学教育人間科学部

**新潟大学教育人間科学部附属長岡中学校

- ・部活動型クラス合唱中心の授業により、より高度な音楽表現の追求をねらった題材設定がなされること。

である。

一方、「音楽授業と家庭・地域・社会とのかかわり」、「音楽と宗教、祭礼、行事などのかかわり」「他教科とのかかわり」など、内外の諸状況の変化により、音楽科はこれまで以上に様々なことがらと「かかわり」ともっていく必要をせまられている。これらの「かかわり」を整理すると次のことが言える。

- ・音楽授業を文化とのかかわりにおいて捉えることの必要性。
- ・授業においては、音楽が学校の他の教育活動や諸活動と深くつながり合って存在していること、同時に、学習者の学びの姿を総合的に捉えることの必要性。
- ・そのために、教師と児童・生徒の学び合いという学習の基本的な関係を土台としながら、教師と児童・生徒が音楽文化に対して働きかけ、相互に交流し合うような授業を構成していくこと。

こうした視点にたった授業は現在いくつも提案されつつある。また、これらは実際「表現」「鑑賞」といった「領域」の発想を越えたものとなっている⁶⁾。

以上の検討から、学校における音楽授業は、「音楽という文化が自分や人間にとってどのように位置付けられているかを知り、それが生きていく上でどのような意味や価値を持つのかをわかっていくこと。そして、学習者が真の文化的実践者として成長していくことを願うもの」であるといった授業観が導きだされた。そのためには授業構想の基盤として次のことが重要視されなければならない。すなわち、・広く社会に存在する文化としての音楽を視野に入れながら、・学習の中心に自己や人間の存在を置き、音楽をそれらとの関係において捉え直そうとすること。その際、・音楽が自分のものであるという学習者の実感が授業の出発点となる。

II アクト (Act) とシーン (Scene)

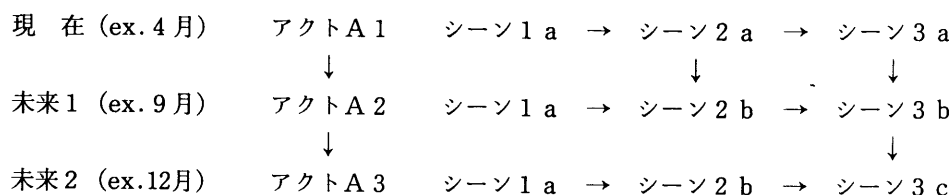
授業に対するこのよう基本的な立場は、必然的に従来の「領域」「題材」といった授業構成の枠組みに捕らわれない、より緩やかで変容性のある授業の構成原理を求めてくる。そういった中で生み出されたのが、アクト (Act) とシーン (Scene) といった用語である。

「アクト」「シーン」の用語は、もともと劇の第○幕 (Act) 第○場 (Scene) という形で使用される。もとよりすぐれた劇は、ステージ上の各場面 (Scene) が各々の独立性を保ちながらも相互に深くつながりあって豊かに膨らんで、一つの Act を形成していく。さらにこの Act は他の Act を導きだして、劇の全体を構成していく。「アクト」「シーン」の用語の援用は、学習者に音楽とかかわる場面を与え、そこから生まれたテーマを自己や人間との関係において創造的に取り組み膨らませていこうという意図を持つ。

教師は学習者と音楽とのかかわりといった視点において、アクトを構想しながら、各々のシーンを構想し、学習の実際に照らし合せて日々の授業を実践していくこととなる。また一つのシーンは、次のシーンへと導かれ、結果として大きなアクトを形成することにもなる。

アクトとシーンとのこうした関係は、シーン相互の関係、シーンとアクトの関係、アクトとアクトの関係においても固定的であるよりもむしろ動的で、いわば一つの生命体のように生成的に発展するものである。具体的に言えば、一つのシーンによる学習は、次のシーンを形づくるものであり、あらかじめ計画されていた次のシーンは、直前に実施されたシーンによって自らの変容を余儀なくされる。こうしたシーンのつながりがアクトを形成する。アクトとアクトの関係もまた同様である。

図1 「アクト」「シーン」の関係図



こうした授業の構成は当然、学習内容とも連動してくる。先に指摘したように、アクトとシーンによる授業は、あくまでも学習者と音楽とのかかわりを基盤としている。その意味においては、いわゆる新しい学力観に立つ音楽科が標榜するところの、「子供の立場に立つ目標の設定」「子供の立場に立つ学習内容の設定」「子供と音楽とのかかわりを重視した教材の工夫」⁷⁾と軸を供するものである。しかしながら、これまでも主張してきたように、本研究の特徴は学習者と音楽とのかかわりについて前述した授業観の上に立ちながら、従来の題材による授業構成の反省点を考慮し、「アクト」「シーン」による提案をし、新たな音楽科の授業構成の原理を確立しようとする点にある。

先の小論では、こうした「アクト」「シーン」及び学習内容の設定について概観を示した。これらの問題点や有効性は具体的な実践を検証することにより明かにされなければならない。

以下、具体的な実践をあげて考察したい。

[伊野義博]

Ⅲ 「アクト」「シーン」の設定と変容

次に述べるのは、中学校1年生に対して実際に授業実践をした記録である⁸⁾。その構成は次のようになっている。

事例1 (年度当初計画段階、平成11年4月) → 事例2 (平成11年5月) → 事例3 (平成12年1月)

1 事例1

第1学年3組音楽科学習援助案

授業者 池田 芳幸

1. アクト 私と音楽

～シーン1「声で表現しよう! (音楽表現って何?)」～

2. アクトのねらい

自分自身と音楽のかかわりを意識化(再認識)することによって、様々な音楽のもつよさや素晴らしさを感じ取ったり、「音楽」や「表現」について多角的なアプローチを試みることで、音楽とのかかわりを更に深めたり、広げたりすることができる。

3. アクトの構想 (全70時間)

時	シーン	おもな学習活動	かかわりの視点・ねらい
10 ↓ 14	1 声で表現しよう！ (音楽表現って何？)	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校時の既習曲の中から誰でも歌えそうな曲を自分に一番合った声で歌う。 ・附属長岡中学校校歌の旋律を把握し、明るく、元気のよい表現を追求する。 ・声の仕組みや声域調査などから「声」について理解を深める。 ・身近にある音楽の中で「声」を使った表現について調べ、様々な表現を追求する。 ※学習の展開に応じ、「魔王」の鑑賞と関連づける。	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽表現の上で自分にとって一番身近であると思われる「声」を使った音楽とのかかわりを意識化し、様々な表現方法を追求することによって音楽への興味・関心を広げられるように援助を図る。 ・「表現」についての多角的なアプローチを試みることによって、音楽表現へのかかわりを深められるように援助を図る。
10 ↓ 15	2 身近にある音楽を形作るもの(音楽って何？)	<ul style="list-style-type: none"> ・今流行の音楽の特徴は何か、を様々な観点から追究する。 ・クラシック系、演歌系、民族系、ポップス系等様々なジャンルの音楽についての共通点や相違点などからそれぞれの音楽を形づくるものは何か、を探る。 ・音楽を形作る様々な要素、事象などについてまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・身近にある音楽の特徴を探る活動を通して、楽曲を構成する要素、事象とのかかわりを深め、身近にある様々な音楽への価値観を深める。
20 ↓ 25	3 音楽をつくろう！ (様々な表現)	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な表現活動を通じ、音楽を実際に形作る過程を体験する。 ・他とのかかわりの中でよりよい学習方法や表現のしかたを追求する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽を形作る活動を通じ、他とのかかわりを深めながら、音楽活動における学習方法、表現方法の拡充を図る。 ・集団で作り上げる音楽表現への価値観を高める。
5 ↓ 10	4 日本のまわりにある音楽(価値観を広げよう)	<ul style="list-style-type: none"> ・身近にある音楽からやや視野を広げ、郷土やわが国の音楽に親しむ。 ・アジアや日本の音楽と身近にある音楽(西洋的な音楽)との音の響きや重なりの違いを追究し、西洋音楽的な表現以外で作られる音楽への理解、関心を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・普段はあまり耳にしたり、体験したりすることの少ない音楽の分野とのかかわりを深める。 ・西洋以外の音楽とのかかわりを深めながら、音楽に対する価値観を広げる。
5 ↓ 10	5 音楽の可能性(表現を広げよう！)	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽の3要素以外で音楽を作ることはできるか、追究する。 ・ミュージックコンクレート、ボイスコンポジション、コールアンドリスポンス等の手法を紹介し、音楽への視野を広げる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今までに体験したことのない音楽活動とのかかわりを深め、様々な表現方法や価値観が存在することを体感できるようにする。 ・身近な音楽だけでなく、広い視野で音楽活動を捉えていけるように援助を図り、来年度の音楽活動に円滑につなげる。

4. 生徒とシーン

(1) 生徒の実態

生徒のまわりには生まれた時点から種々雑多な音楽が溢れ、様々なマスメディアを通して、個々の生徒は生活の中でそれらの音楽と様々な形でかかわってきた。

また、個人的に音楽教室に通いながら、ピアノ、バイオリン等の知識、技能を身に付けている生徒も数多い。

しかし、入学当初は小学校での歌唱表現の際に「頭声発声」を強いられたことが原因となり

歌唱に対し嫌悪感を持つ生徒も少なくはなかった。また、すでに変声期に入っている生徒などは「声」で表現することに対し、消極的な姿勢が見られた。

そこで、彼らにとって最も身近な表現媒体である「声」についての理解と「声」による表現への積極的な姿勢を培うことをねらいとして、生徒は中学校入学以来「声」による表現活動を通し、「音楽」及び「表現すること」への興味・関心を高める活動に取り組んできた。

現在では生徒の「表現」に対する姿勢が少しずつ変化してきている状態である。

(2) 「シーン1」について

昨年度は「シーン1」に「テレビの中の音楽」という生徒の一番身近なところにある音楽を再確認し、それらとのかかわりをさらに深める学習を位置づけた。しかし、どの学校でも入学当初の生徒には「校歌」の指導や中学校の音楽授業へのオリエンテーション的な指導が一般的に当然必要であることから、シーン1に「テレビの中の音楽」という学習内容を位置づけることが適切であるかが疑問視された。

そこで今年度は「シーン1」の設定に改善を加え、「声で表現しよう!」を位置づけることにした。ここでは、自分のまわりに存在する音楽と自分とのかかわり、という視点ではなく、音楽をする上で根源的にすでに彼らが所有している（もっとも身近にあると言ってもよいだろう）彼ら自身または人間の「声」と音楽とのかかわりに焦点を当てるところから中学校の音楽授業をスタートしようと考えた。

本シーンでは「テレビの中の音楽」や今流行の「ジャパニーズポップス」といった自分の外側に存在する音楽とのかかわりではなく、人間の「声」と音楽のかかわりを通して、生徒自身に音楽を「声」で表現することのよさや素晴らしさを感じ取ってほしいと願っている。

5. 本シーンにおいて提案したいこと

従来であれば、題材を構成する時「表現」「鑑賞」という領域を考慮しながら題材の学習内容を決定する場合が多かったと思われる。この場合、歌唱表現で「3部合唱に親しもう」、鑑賞で「パイプオルガンの豊かな響き」、器楽表現で「リコーダーの豊かな響き」等、というように領域の「表現」や「鑑賞」を分析し、下位目標的に細切れの題材をつなぐことになる。

しかし、今までかつて「表現」そのものの自体「鑑賞」そのものの自体を学習内容として位置づけたことがあっただろうか。

表現及び鑑賞領域の細切れ的な題材の羅列で生徒は本当に「表現」「鑑賞」そのものの自体を学ぶことができるのであろうか。

残念ながら、従来の数ある音楽教育の実践研究からは上述の答えを得ることができない。

そこで、このシーン1では人間の声と音楽表現に焦点を当て、そこから「音楽表現」とは何なのかを生徒ともに探究していけるような授業を構想した。まさに「表現」そのものが学習の対象である。（「表現すること」ではなく、「表現」そのものが学習対象であるところが従来と異なる点である。）

音楽表現の最も根源的（原初的）な媒体を1人1人が生まれた時点で所有し、その媒体を通してできる「表現」の可能性を探ることは今後、生徒一人一人の音楽とのかかわりをさらに深め、広げていける1つの手掛かりとなると考える。

6. シーンの目標

- ・「声」を使った音楽とのかかわりを意識化し、様々な表現方法を追究することによって音楽への興味・関心を広げることができる。
- ・「表現」についての多角的なアプローチを試みることによって、音楽表現へのかかわりを深めることができる。

7. 「シーン1」援助構想(全10～14時間)

時	おもな学習活動	生徒の学びの姿	教師の援助	かかわりの視点 (評価・留意点等)
6 ～ 8	<p>○小学校時代の復習と音楽の授業の雰囲気づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校時代の既習曲を歌う。 <p>＜例：翼をください、気球に乗ってどこまでも、Tomorrowなど＞</p> <p>○声の仕組みを知ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発声の仕方の確認。 <p>・声の仕組みについて理解する。</p> <p>○「校歌」を覚えよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「校歌」の旋律把握を行う。 ○自分の声を理解する。 ・声域調査を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校時代に学習した発声の方法で各自が歌う。 頭声的発声で歌う生徒がほとんどであろう。 <ul style="list-style-type: none"> ・自分で最も歌いやすい発声の仕方を各自で確認したり、探したりする。 <ul style="list-style-type: none"> ・声の出る仕組みや声帯の機能、歌う時の呼吸また変声期等についても理解する。 <ul style="list-style-type: none"> ・自分で一番歌いやすい声で校歌を歌う。 ・1番から3番までの歌詞を覚えながら元気よく歌う。 ・自分の声域をプリントに従って調べる。 ・自分の声の状態を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自由に表現できる雰囲気づくりに努める。 ・小学校時代での発声のしかたで気軽に歌える雰囲気を作る。 <ul style="list-style-type: none"> ・頭声的発声で歌っている男子には自分が一番歌いやすい歌い方でよいことをアドバイスする。 ・「声帯」は筋肉であることを認識させ、体の他の組織と同様に鍛えれば鍛えるほど強くなることを納得させる。 ・最初に全体でプリントに従って自己判断させながら調査を行う。 ・個人ごとに声の状態を教師が調べ、声の出し方について必要に応じてアドバイスする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校の音楽授業への興味・関心を最大限高める。 <ul style="list-style-type: none"> ・意欲と関心をもちながら中学校の音楽に取り組もうという姿勢を持つことができたか。 ・声の仕組みを理解し、自分が一番歌いやすい声でまわりの生徒とともに楽しく思い切って歌うことができたか。 ・自分の声の状態を正しく把握することができたか。
1 ～ 2	<p>○「声」を使った表現</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「声」のイメージを表現する。 <p>・様々な表象を「声」で表現する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「声」の伝言ゲーム。 <p>・「声」の表現とは何かを考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・声についてのイメージをまとめる。 例：きれいな声、高い声、がらがら声、子どもの声、叫び声等 ・イメージした声を実際に表現してみる。 ・オブジェや物、色、感情等を「声」で実際に表現してみる。 ・自分のイメージした表象を他の生徒に「声」で伝える。 ・表象や感情をどうしてそのような「声」で表現できるのかを考える。(様々な声の表現の違いや共通点を考える。) 	<ul style="list-style-type: none"> ・「声」のイメージを思いっただけあげさせる。 ・表現に使える「声」は言葉や意味のともなわないものとする。 ・いくつかのグループに分け、教師が提示した表象で伝えさせる。 ・意見が出ないようであれば、様々な声の表現の違いや共通点を考えてみるようアドバイスする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「声」を使った表現を意識化し、声による様々な表現方法を追究することによって「表現」への興味・関心を高める。 ・楽しみながら「声」による表現について追究を深めているか。

3 5	<p>○「声」と音楽表現</p> <p>・音楽の中の「声」について調べる。</p> <p>・音楽表現をする上での「声」の役割を考える。</p>	<p>・身近にある様々な音楽の中では、どのような声が使われているのかを調べ、発表し合う。</p> <p>＜予想される調査項目＞</p> <p>音楽の分野、音高、音色、強弱、歌詞、場面、用途目的、効果、その理由等</p> <p>・発表を聞いて「音楽表現」をする上での「声」の役割について自分なりにレポートにまとめてみる。</p> <p>・自分の声を最大限音楽の中で生かすためにはどうしたらよいか、ということも合わせて考えてみる。</p>	<p>・各自に資料やビデオ、CD、カセットテープ等の音源を持ち寄らせ、「声」を使って表現している音楽についてできるだけ実際の音や映像とともに発表させるようにする。</p> <p>・教科書・資料集の他にインターネットや市立図書館等で適宜調べられるようにする。</p> <p>・必要に応じて個人またはグループでの活動を組織する。</p> <p>・自分の声のよさや特徴を自分なりに振り返ることができるように援助を図る。</p>	<p>「声」を使った音楽とのかかわりを深めることによって、音楽表現への興味・関心を高める。</p> <p>・身近にある音楽の中での声の使われ方について積極的に調査、発表することができたか。</p> <p>・音楽表現における「声」の役割を自分なりに感じ取ることができたか。</p>
--------	---	---	--	---

2 事例2

第1学年3組音楽科学習援助案

授業者 池田 芳幸

1. アクト 私と音楽

～シーン4 音楽の不思議③「感覚（イメージ）と音楽」～

2. アクトのねらい

自分自身と音楽とのかかわりを意識化（再認識）することによって、様々な音楽のもつよさや素晴らしさを感じ取ったり、「音楽」や「表現」について多角的なアプローチを試みることによって、音楽とのかかわりを更に深めたり、広げたりすることができる。

3. アクトの構想 (全70時間)

時	シーン	おもな学習活動	かかわりの視点・ねらい等
6 ↓ 8	1 音楽って何？ (ウォーミングアップ)	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校時代までの音楽に関するアンケート調査 ・「校歌」の旋律把握 ・「声」の仕組みの理解や「声域調査」を通して「声」についての理解を深める。 ・「私と音楽」学習プリントを行う (資料参照) 	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽に対する一人一人の考え方、姿勢、態度などを把握する。 ・旋律把握の活動を通し、小学校時代の「歌唱」に対してのかかわり方を把握する。(発声、表現、歌うことに対しての意識や態度、技能等) ・音楽の授業＝頭声発声という狭い意識からの脱却を促す。(音楽に対するかかわり方の転換を促す) ・「音楽」とは何かについての根源的な質問を行い、あらためて「音楽」というものを見つめる場面を設定し音楽についての再認識化を図る。
8 ↓ 10	2 音楽の不思議① 「数と音楽」	<ul style="list-style-type: none"> ・学習プリントの全員の記述を見ながら、音楽への考え方や思いが人それぞれ様々であることを認識する。 ・音楽の不思議さの中で「数（数学）と音楽」の関係について考えてみる。(次の項目について考えてみる) ※円周率に音楽が存在するのか。 ※三角形に音楽（音）が存在するのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・プリントの答えには「正解」は存在しないことを理解させ、音楽とは何か、いどうことへの興味・関心を高める。 ・πに音階をあてはめた音楽を例にとり、偶然の中にも音楽らしきものがあることを実感させる。 ・3:4:5の辺の比をもつ直角三角形を例にとり、そこには「ドミソ」のハーモニーが存在することを実感させる。
	3 音楽の不思議② 「自然と音楽」	<ul style="list-style-type: none"> ・三角形に存在する音は自然界にある「倍音」と呼ばれる音の種類であることを理解する。 ・「倍音」について理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノで低音のCを鳴らしたときにCEGBの属七の和音が共鳴することを実際に体験させる。 音の高さや音程、ハーモニーは人間が音楽を始める前にすでに存在していたのではないかと音の不思議さを投げかける。
	4 音楽の不思議③ 「感覚（イメージ）と音楽」	<ul style="list-style-type: none"> ・学習プリントの記述を参考にしながら、「すべての音（音楽）は何らかのイメージ（感覚）を共通に私たちに与えるのか」ということについて考えを膨らませる。 ・様々な事象を「音」で表現してみる。 ・個人またはペアで追究 (2つの対比するものを音で表す) ・グループで追究、発表 (3つ以上の対比するものを音で表す) ・イメージや感覚は「音」の何によって変化するのかを追究、発表を通して考えをまとめる。 ・他の音楽家の作品を参考にしてみよう。(四季、等) 	<ul style="list-style-type: none"> ・音によって人間の持つイメージや感覚が変化し、様々な事象を「音」で表現できることを認識化することによって、音楽への興味・関心を高める。 ・自分で描いたイメージや感覚を実際に音で表現できる場を設定する。 ・自分の表そうとしたものを音によって「音」で他人に伝えられるかを試す。 ・対比するものが多くなったときはどうか、グループで試し、発表してみる。 ・ここでは器楽曲を中心に鑑賞を行わせる。 ・音の出し方や組み合わせだけでなく、「リズム」もイメージや感覚の変化に大きな要因があることを適宜気づかせる。

8 ↓ 10	5	声と音楽	<ul style="list-style-type: none"> ・「魔王」の鑑賞を行い、「声」による表現について関心を持つ。 ・なぜ「声」が音楽に用いられるのか、また、「声」で何が表現できるのか、について追究する。 （様々な事象を実際に声で表現してみる、声の伝言ゲームなど取り入れる） ・様々な分野の音楽の中で「声」がどのような使われ方をしているか、どのような「声」が使われているのかを追究する。 （様々な分野の音楽調べ等取り入れる） 	<ul style="list-style-type: none"> ・「声」を使った表現を意識化し、声による様々な表現方法を追究することによって、表現への興味・関心を高める。 ・「声」を使った音楽とのかかわりを深めることによって音楽表現への興味・関心を高める。
	6	言葉、詩と音楽	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉や詩があることによって「声」だけの表現や器楽での表現と何が違う（変わる）のかを考える。 ・言葉、詩のある音楽（「歌」）の表現のあり方について追究する。（言葉のイントネーション、韻と音楽の関係、言葉のもつ意味と音楽との関係など） 	<ul style="list-style-type: none"> ・「声」を使った音楽表現と密接なかわりのある「言葉」や「詩」の音楽の中での役割を考え、表現への興味・関心をより深める。
20 ↓ 24	7	表現と音楽① 「歌（合唱）と音楽」	<ul style="list-style-type: none"> ・「合唱」（詩＋声＋音＋ピアノ＋指揮）で何が伝えられるのかを合唱を作り上げていく過程で追究する。 ・合唱（音楽）を作り上げていくために必要なこと（方法、内容含めすべてにわたって）を全員で考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今まで学習してきたことを生かしながら実際の楽曲を通じ「音楽を作り上げる」とは、どういうことか、を体験させる。また、このことによって音楽表現への興味・関心をさらに深めさせる。
10 ↓ 12	8	表現と音楽② 「表現の可能性」	<ul style="list-style-type: none"> ・今までの学習以外で表現する方法について考える。 ・日本や他国の音楽などを参考にしながら様々な表現があることを知る。 ・ミュージックコンクレート、ボイスコンポジション、コールアンドリスポンス等の手法を紹介、実際に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今までに体験したことのない音楽活動とのかかわりを深め、様々な表現方法や価値観が存在することを体感させ、音楽的視野を広げる。
4 ↓ 6	9	自分と音楽 （1年生のまとめ）	<ul style="list-style-type: none"> ・1年間で学習してきたことを「音楽と私」というテーマでレポートを作成する。 ・お互いに音楽への思いを発表し合う。（表現する手段は個々に任せる） 	<ul style="list-style-type: none"> ・1年間の学習を振り返らせ、自分と音楽のかかわりがどのように変容してきたかを認識化させる。

4. アクト「私と音楽」について

本アクト「私と音楽」は昨年までのアクト「私たちの身のまわりにある音楽」とは全く異なった視点で構成されている。昨年のはどちらかというと生徒の身近にある生活の中にある音楽からエキス（音楽の要素等）を取り出し、教材化していきながら、しだいに生徒にとってあまり身近ではない（たとえば、アジアの音楽やミュージックコンクレート等）へと生徒の興味関心を向けながら、音楽とのかかわりを広め、深めていこう、という視点で授業が構成されていった。

しかし、今回のアクトは前年度のものとは全く発想が逆である。昨年度のものであれば「音楽と宇宙、自然」をテーマに掲げるのは3年生になってからであった。しかし、今回は1年生のうちから音楽の最も根源的な部分から学習をスタートする試みを行った。今までは「やさしいものからむずかしいものへ」「平易なものから不可解なものへ」といったような教師の暗黙のプログ

ラムができあがっていたことによって、どうしても、逆の発想からの授業展開を構築するというのは無理があった。しかし、そもそも「音楽」自体何かを説明できることは不可能であることなのだから、「音楽」の究極の謎からスタートし、生徒とともにその謎を解いていくような授業構成も可能なのではないか、という発想をもったのである。

この発想から生まれたのがこのアクト「私と音楽」である。

5. 生徒とシーン

(1) 生徒の実態

シーン1では、生徒にとって最も身近な表現媒体である「声」についての理解と「声」による表現への積極的な姿勢を培うことをねらいとして、「声」による表現活動を通し、「音楽」及び「表現すること」への興味・関心を高める活動に取り組んできた。それとともに、「音楽」とは何かという根源的な問いを行い、「音楽」というものをあらためて見つめる場面を設定することによって音楽への再認識化を行ってきた。

シーン2からは、「音楽」とは何かという問いを、更に深めさせるために「音楽の不思議」というテーマで学習を進めている。シーン2「数と音楽」及びシーン3「自然と音楽」の中で生徒は数学と音楽との不思議なかかわりや自然倍音の理解などを行ってきた。

現在では「音楽」や「音」というものに対して今までになく「謎」を深めている生徒が多いと思われる。

(2) 「シーン4」について

このシーン4では人間の感覚やイメージと音楽とのかかわりを再認識させようと考えた。シーン3まではいわば、自分の外側にある（自然や数など）ものとのかかわりから音楽の不思議さを体験してきた。しかし、このシーン4では、自分自身や人間の感覚と音楽、という自分の内側にあるものと音楽とのかかわりを再認識させようと考えた。

「すべての音は何らかのイメージや感覚を共通に私たちに与えるのか」という根源的及び普遍的な問いを彼らに示すことによって、今まで無意識のうちに過ごしてきたほんのわずかな音の変化や対比等に対して敏感になり、なぜそのようなイメージや感覚が発せられるのか、という疑問を誰でもが抱くことになる。このような疑問は「表現」する上では欠かすことのできない事であると考え。なぜならば、たとえば、いくら教師が「もっとやさしく歌いましょう」と訴えたところで「やさしさ」という音のイメージや感覚が表現する本人に育っていなければ不可能なことである。

どんな「音」がどんなイメージや感覚を私たちに与えるのか、という視点をそれぞれの生徒がもつことによって、必ず生徒の表現に対する姿勢は変容してくるにちがいない、と考える。

6. シーンの目標

音によって人間のもつイメージや感覚が変化し、様々な事象を音で表現できることを認識化することによって、音楽への興味・関心を高める。

7. シーン4の援助構想

	おもな学習活動	教師の援助	かかわりの視点・ねらい (評価・留意点等)
1	○「すべての音(音楽)は 何らかのイメージ(感覚)を 共通に私たちに与えるのか」と いうことについて考えを 膨らませる。 ○様々な事象を「音」 で表現してみる。	・学習プリントの質問項目「音楽で表現できること…」 の記述を参考にさせながら、音によって表現できること はこれだけなのか、を考えさせる。 ・追求課題の提示 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> どんな「音」がどんな「イメージ」や「感覚」を 持たせるのか。 </div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> ・音によって人間の 持つイメージや感覚 が変化し、様々な事 象を「音」で表現で きることを認識化す ることによって、音 楽への興味・関心を 高める。 </div>
1	<追求1> ・たった1つの音で表 現できるか事象にはど んなものがあるか。 <追求2> ・1つの音で表現でき ない事象をどうやたら 表現できるか。 (対比する2つの事象 の表現)	・いくつかの事象を提示し、たった1つの音で表現でき る可能性を探らせる<例>高さ、大きさ、長さ、速さ etc。 ・自分で表現した音が他の人にどんなイメージや感覚を 与えるかを確かめさせる場を作る。 ・1つの音では表せない事象にはどんなものがあるか考 えさせる。 ・1つの音では表せないであろう事象をいくつか提示し、 どうやって表現するかを個々に探る。 <例>明暗、悲しみと喜び、調和と混沌、スキップとマ ーチ	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> ・1つの音で表現で きる可能性に興味を 持って追求しようと しているか。 ・様々な事象の表現 を積極的に探求して いるか。 </div>
2 ↓ 3	<追求3> ・3つ以上の対比する 事象をどうやたら表 現できるのか。 ※グループでの追求と 発表(クイズ大会) ○どんな音がどんなイ メージや感覚を与える のかについてまとめる	・4人グループを組ませ、それぞれ異なる事象について 表現するにはどうしたらよいかを探らせる。 ・それぞれのグループが取り組んだ事象を全員に知らせ、 他の生徒がその表現によって事象を当てることができる か確かめさせる。 ・イメージや感覚は「音」の何によって変化するのかに ついて追求、発表を通して感じたこと、考えたことに基 づいてまとめさせる。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> ・難しい課題をグルー プで協力しながら解 決しようとしている か。 ・追求を通じて感じ 取ったことを自分な りにまとめることが できたか。 ・音の出し方や組み 合わせだけでなく、 「リズム」もイメー ジや感覚の変化に大 きな要因があること に気づくことができ たか。 </div>
1 ↓ 2	○他の音楽家の作品を 参考にしてみよう。	・ヴィヴァルディの「四季」の中の春夏秋冬からそれ ぞれ1曲ずつ鑑賞し、季節を当てさせる。 ・作曲家がどんなイメージをどんな音で表現しようとし ているのかについて部分的に取り上げながら鑑賞させる。	

8. 本時の学習(5/5～7時間)

(1) 本時の授業で提案したいこと

本時にいたるまで、生徒は「すべての音は何らかのイメージや感覚を共通に私たちに与えるのか?」というテーマで学習に取り組んできた。その中で、対比する2つの事象(イメージや感覚)の表現や「たった1つの音」だけでの表現の可能性について探ってきた。

前時と本時においては、その追求をさらに4つの対比する事象の表現に広げ、グループでの表現について追求し、発表する活動を組織した。

この学習によって類似する事象や抽象的な事象の表現の困難さを実感させるとともに、「音」

によって表現するおもしろさを感じ取らせたい、と考えた。

本時の学習は「発表」という到達点はあっても、従来のように教師の視点による「表現」の到達点はない。

また、「発表した表現が生徒全体に共通に伝わるかどうか、感じ取れるかどうか」という視点がこの時間の絶対的な基準となり、「表現」の内容がいかなるものであったとしても、「表現」の内容を評価することはできない。(表現の内容を比較したり、優劣をつけることは無意味なことである。)

このような学習において教師は「表現」の内容を評価するのではなく、その「表現」と生徒がどのようにかわろうとしているのか、を評価すべきである。

ここでは「どんな音によってどんな事象を表現することができるのか」ということを生徒自身がどのように感じ取ることができたか、ということの評価していきたい。そのことによって、生徒一人一人が音楽や表現とのかかわりを更に広めたり、深めたりしていくことができるようにしていくことが重要であると考ええる。

(2) ねらい

- ・様々なイメージや感覚が「音」で表現できることを感じ取り、音による表現のおもしろさを味わうことができる。(音、音楽への興味・関心)
- ・様々なイメージや感覚と音による表現のかかわりを感じ取りながら、どんな音がどんなイメージや感覚を与えるのか、について自分なりにまとめることができる。(音、表現への再認識化)

(3) 展開

分	おもな学習活動	生徒の学びの姿	教師の援助	かかわりの視点 (評価・留意点等)
5	○前時の復習と課題の確認	<ul style="list-style-type: none"> ・今日の課題を確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p><課題1></p> <ul style="list-style-type: none"> ・前時にグループで追求したことをお互いに発表し合いながら、それぞれ4つの対比するイメージや感覚を全員に伝えることができるか試そう。 <p><課題2></p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表を聴きながらどんな音がどんなイメージや感覚を私たちに与えるのかを考えよう。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しい中にもお互いの発表を真剣に聴き合おうとする雰囲気を作る。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・音によって人間の持つイメージや感覚が変化し、様々な事象を「音」で表現できることを認識化することによって、音楽への興味・関心を高める。 </div>
35	○グループ発表(クイズ大会)	<ul style="list-style-type: none"> ・10のグループでそれぞれ追求してきたイメージや感覚を全員に知らせ、全員にそのイメージや感覚がどれかを当ててもらおう。 <p><追求してきた表現></p> <ul style="list-style-type: none"> ・季節 春・夏・秋・冬 ・温度 冷・寒・暖・暑 ・形 ○・□・△・☆ ・色 白・赤・青・黄 ・感情①喜び、楽しみ、幸せ、愛 ・感情②悲しみ、絶望、怒り、憎しみ ・天気 快晴・晴・曇・雨 ・自然 氷・水・湯・水蒸気 ・時間 大昔・過去・現在・未来 ・味 甘い・辛い・しょっぱい・すっぱい 	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれが表現するイメージや感覚をまず、全員に知らせ、それをどういう順番で表現したかを当てさせる。 ・どのようにイメージや感覚を伝えようとしていたか、なぜ伝わったのかまたは伝わらなかったのか、を感じ取りながら発表を聴くようにさせる。 ・順番をすべて正しく当てた人の人数を確認する。 ・必要に応じて、なぜ表現が伝わらなかったか、などの意見交換を随時行わせる。 ・発表を聴きながら、どんな点を工夫しているか、気づいたことなどもプリントに記入させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しみながらも真剣の各グループの表現を聴こうとしているか。 ・4つのそれぞれ異なる(対比する)イメージや感覚の表現の違いを敏感に感じ取ろうとしているか。

10	○まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・どんな音がどんなイメージや感覚を私たちに与えるのかについてまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・イメージや感覚は「音」の何によって生じるのか、について追求や発表を通じて感じたこと、考えたことに基づいてまとめるように指示する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・追求や発表を通じて感じ取ったことを自分なりにまとめることができたか。
----	------	---	---	---

3 事例3

第1学年1組音楽科学習援助案

授業者 池田 芳幸

1. アクト 私と音楽 ～シーン7 音楽って何②「音楽にとって大切なもの」～

2. アクトのねらい

自分自身と音楽とのかかわりを意識化（再認識）することによって、様々な音楽のもつよさや素晴らしさを感じ取ったり、「音楽」や「表現」について多角的なアプローチを試みることによって、音楽とのかかわりを更に深めたり、広げたりすることができる。

3. アクトの構想（全70時間）

時	シーン	おもな学習活動	かかわり視点・ねらい等
6 ～ 8	1 音楽って何？① (ウォーミングアップ)	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校時代までの音楽に関するアンケート調査 ・「校歌」の旋律把握 ・「声」の仕組みの理解や「声域調査」を通して「声」についての理解を深める。 ・「私と音楽」学習プリントを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽に対する一人一人の考え方、姿勢、態度などを把握する・旋律把握の活動を通し、小学校時代の「歌唱」に対してのかかわり方を把握する。（発声、表現、歌う、ことにたいしての意識や態度、技能等） ・音楽の授業＝頭声発声という狭い意識からの脱却を促す。（音楽に対するかかわり方の転換を促す） ・「音楽」とは何かについての根源的な質問を行い、あらためて「音楽」というものを見つめる場面を設定し音楽についての再認識を図る。
8 ～ 10	2 音楽の不思議 ①「数と音楽」	<ul style="list-style-type: none"> ・学習プリントの全員の記述を見ながら、音楽への考え方や思いが人それぞれ様々であることを認識する。 ・音楽の不思議さの中で「数（数学）と音楽」の関係について考えてみる。（次の項目について考えてみる） ※円周率に音楽が存在するのか。 ※三角形に音楽（音）が存在するのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・プリントの答えには「正解」は存在しないことを理解させ、音楽とは何か、ということへの興味・関心を高める。 ・πに音階をあてはめた音楽を例にとり、偶然の中にも音楽らしきものがあることを実感させる。 ・3：4：5の辺の比をもつ直角三角形を例にとり、そこには「ドミソ」のハーモニーが存在する事を実感させる。

	3	音楽の不思議② 「自然と音楽」	<ul style="list-style-type: none"> ・三角形に存在する音は自然界にある「倍音」と呼ばれる音の種類であることを理解する。 ・「倍音」について理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノで低音のCを鳴らしたときにCEGBの属七の和音が共鳴することを実際に体験させる。 音の高さや音程、ハーモニーは人間が音楽を始める前にすでに存在していたのではないかと音の不思議さを投げかける。
	4	音楽の不思議③ 「感覚（イメージ）と音楽」	<ul style="list-style-type: none"> ・学習プリントの記述を参考にしながら、「すべての音（音楽）は何かのイメージ（感覚）を共通に私たちに与えるのか」ということについて考えを膨らませる。 ・様々な事象を「音」で表現してみる。 ・個人またはペアで追求（2つの対比するものを音で表す） ・グループで追求、発表（3つ以上の対比するものを音で表す） ・イメージや感覚は「音」の何によって変化するかを追求、発表を通して考えまとめる。 ・他の音楽家の作品を参考にしてみよう。（四季、等） 	<ul style="list-style-type: none"> ・音によって人間の持つイメージや感覚が変化し、様々な事象を「音」で表現できることを認識することによって、音楽への興味・関心を高める。 ・自分で描いたイメージや感覚を実際に音で表現できる場を設定する。 ・自分の表そうとしたものを音によって「音」で他人に伝えられるかを試す。 ・対比するものが多くなったときはどうか、グループで試し、発表してみる。 ・ここでは器楽曲を中心に鑑賞を行わせる。 ・音の出し方や組み合わせだけでなく、「リズム」もイメージや感覚の変化に大きな要因があることを適宜気づかせる。
8 ↓ 10	5	声と音楽	<ul style="list-style-type: none"> ・「魔王」の鑑賞を行い、「声」による表現について関心を持つ。 ・なぜ「声」が音楽に用いられるのか、また、「声」で何が表現できるのか、について追求する。 （様々な事象を実際で声で表現してみる。声の伝言ゲームなど取り入れる） ・様々な分野の音楽の中で「声」がどのように使われ方をしているか、どのような「声」が使われているのかを追求する。 （様々な分野の音楽調べ等取り入れる） 	<ul style="list-style-type: none"> ・「声」を使った表現を意識化し、声による様々な表現方法を追求することによって、表現への興味・関心を高める。 ・「声」を使った音楽とのかかわりを深めることによって音楽表現への興味・関心を高める。
24 ↓ 28	6	表現と音楽「歌（合唱）と音楽」	<ul style="list-style-type: none"> ・「合唱」（詩＋声＋音＋ピアノ＋指揮）で何が伝えられるのかを合唱を作り上げていく過程で追求する。 ・合唱（音楽）を作り上げていくために必要なこと（方法、内容含めすべてにわたって）を全員で考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今まで学習してきたことを生かしながら実際の楽曲を通じ「音楽を作り上げる」とは、どういうことか、を体験させる。 また、このことによって音楽表現への興味・関心をさらに深めさせる。
10 ↓ 12	7	音楽って何②「音楽にとって大切なもの」 本シーン	<ul style="list-style-type: none"> ・「合唱」で取り組んできた音楽表現について振り変える。 ・「五線譜」がなかったらどのようにして曲を保存するか、を考える。 ・「五線譜」で表現できること、できないことを考える。 ・感情や感覚、気分、雰囲気などを楽譜で表すにはどうしたらよいか考える。 ・タイプの異なる楽曲を聴き、それぞれの音楽にはどんな感情が表されているのかを感じ取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・当たり前として使われている楽譜（五線譜）に焦点をあて、「楽譜」の意味や価値を追求させる。 ・音楽にとって一番重要なことは、楽譜に書かれていないことを感じ取ったり、表現したりすることなのだ、ということを実感しながら、より豊かに楽曲を捉えることができる。

	8	音楽って何③「様々な音楽～音楽表現のもつ意味」	<ul style="list-style-type: none"> ・図形楽譜や現代作曲技法による楽曲、様々な分野の楽曲、邦楽やアジア諸国の民族音楽等を鑑賞し、音楽表現の持つ意味を追求する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ふだん体験する機会の少ない音楽とのかかわりを深め、様々な表現方法や価値観が存在することを体感させ、音楽的視野を広げる。
4 ↓ 6	9	自分と音楽 (1年生のまとめ)	<ul style="list-style-type: none"> ・1年間で学習してきたことを「音楽と私」というテーマでレポートを作成する。 ・お互いに音楽への思いを発表し合う。(表現する手段は個々に任せる) 	<ul style="list-style-type: none"> ・1年間の学習を振り返らせ、自分と音楽とのかかわりがどのように変容してきたかを認識化させる。

4. アクト「私と音楽」と本次研究の関連について

本アクト「私と音楽」は昨年までのアクト「私たちの身のまわりにある音楽」とは全く異なった視点で構成されている。昨年のものはどちらかというと生徒の身近にある生活の中にある音楽からエクス（音楽の要素等）を取り出し、教材化していきながら、しだいに生徒にとってあまり身近ではない（たとえば、アジアの音楽やミュージックコンクレート等）へと生徒の興味関心を向けながら、音楽とのかかわりを広め、深めていこう、という視点で授業が構成されていった。

しかし、今回のアクトは前年度のものとは全く発想が逆である。昨年度のものであれば「音楽と宇宙、自然」をテーマに掲げるのは3年生になってからであった。しかし、今回は1年生のうちから音楽の最も根源的な部分から学習をスタートする試みを行った。今までは「やさしいものからむずかしいものへ」「平易なものから不可解なものへ」といったような教師の暗黙のプログラムができあがっていたことによって、どうしても、逆の発想からの授業展開を構築するというのは無理があった。しかし、そもそも「音楽」自体何かを説明できることは不可能であることなのだから、「音楽」の究極の謎からスタートし、生徒とともにその謎を解いていくような授業構成も可能なのではないか、という発想をもったのである。

この発想から生まれたのがこのアクト「私と音楽」である。このアクトは前次研究で構成されたものではあるが、本次研究での音楽科における「学びを開く生徒」の具現が可能なものと捉える。

このアクトによって今まで当たり前とされてきた教師のあいまいな評価規準を見直し、生徒自身にとって感性的、精神的な高揚を得ることができる最も意味のある本質的な音楽活動とは何かを追求していきたい。

5. 本シーンにいたるまでの生徒の学び

シーン1では、生徒にとって最も身近な表現媒体である「声」についての理解と「声」による表現への積極的な姿勢を培うことをねらいとして、「声」による表現活動を通し、「音楽」及び「表現すること」への興味・関心を高める活動に取り組んできた。それとともに、「音楽」とは何かという根源的な問いを行い、「音楽」というものをあらためて見つめる場面を設定することによって音楽への再認識化を行ってきた。

シーン2からは、「音楽」とは何かという問いを更に深めさせるために「音楽の不思議」というテーマで学習を進めてきた。シーン2「数と音楽」及びシーン3「自然と音楽」の中で生徒は数学と音楽との不思議なかわりや自然倍音の理解などを行ってきた。

これらの学習によって「音楽」や「音」というものに対して今までになく「謎」を深めている生徒が多いと思われる。

シーン4では人間の感覚やイメージと音楽とのかかわりを再認識させようと考えた。シーン3まではいわば、自分の外側にある（自然や数など）ものとのかかわりから音楽の不思議さを体験してきた。しかし、このシーン4では、自分自身や人間の感覚と音楽、という自分の内側にあるものと音楽とのかかわりを再認識させようと考えた。

このようにシーン1から4までは生徒自身に音楽とのかかわりを意識化（再認識）できる場を多く提供し、「音楽とは何か」という問いを積極的に促してきた。

シーン5、6では学習の視点を「音楽」から「表現」へと発展させることによって、これまでの学習対象であった「音楽」というものへの「謎」を「表現」そのものへと広げようと考えた。このことによって、「声」による「表現」のおもしろさや、集団での音楽作りの難しさ、素晴らしさを体験できた生徒が多いと考える。

6. 学びを開く生徒とシーン

(1) 生徒の実態

本シーンにいたるまでの生徒の学び（項目5参照）からもわかるように生徒は今まで、音楽の根源的な問い（音楽とは何か）と向かい合う活動から始まり、音楽や音楽表現というもののへの捉えを再認識化する活動に取り組んできた。

これまでの音楽や音楽表現への多角的なアプローチによって、生徒は音楽とのかかわりをそれぞれ豊かにしてきたと考える。

その中で生徒は、いかに自分の内にあるものを外に表現したらよいのか、また、どのようにすれば、自分の思いを他に正確に伝えることが出来るのか、といったことを「声」や「合唱」の表現活動を通じて強く意識化してきたと考える。

このように生徒はこれまで、音楽を通じて「表現」とはいかなるものか、を学んできた。

また、シーン1からシーン5までの学習の発展であるシーン6「表現と音楽①～合唱と音楽」では、音楽発表会での合唱発表への取組を通じ、集団で音楽を作り上げる喜びを体感した生徒が多かったと思われる。これは音楽科が捉える学びを開く生徒の姿の1つ目である「音楽の楽しさ、喜びにひたり、感動を自ら味わおうとする生徒」の具現へと通じていく体験活動であったと考える。

本シーン7では、これまでに取り組んできた「表現」についての学習をさらに発展させ、音楽にとって最も重要であること、すなわち、「楽譜に書かれていないこと」～「楽譜には音楽にとって一番重要であるもの以外はすべて用意されている。」（G.マーラーの著述から引用）～について追求させ、より豊かに楽曲を捉える（受容する）ことができるように援助を図っていききたい。

このシーンでは音楽科が捉える学びを開く生徒の姿の中の2つ目である「音楽と豊かにのかかわりながら、表現や受容の術（すべ）を学ぼうとする生徒」の具現を意識しながら実践を進めていききたい。

(2) 「シーン7」について

これまでの学習では「音」や「音楽」によって何が伝えられるのか、また、どのような「音」や「音楽」がある種の感情や感覚を生み出すのか等、音楽表現の根底となる部分を常に意識させながら音楽とは何か、私達が求める音楽表現とはいかなるものなのか、を追求してきた。

このシーン7では、これまでが音楽の「表現」を対象とした学習であったことに対し、音楽の「受容」の部分の大きく担う。

従来の「鑑賞」学習であると、鑑賞のねらいがただ単にある種の音楽に親しむであるとか、イメージや情景を思い浮かべる、といった表層的な（個人的な）受容に終わっていたと考えるしかし、このシーンでいうところの「受容」とはそうではなく、個々の生徒のいづく感情、感覚をお互いに研ぎ澄ましていきながら、より豊か（感覚的：Emotional）に音楽を捉えていく活動と考える。

そのためにまず、今まで当たり前として使ってきた楽譜（五線譜）の意味や価値を追求させることによって、音楽で最も大切にすべきこと（楽譜に書かれていないこと）について意識化させ、実際の楽曲を鑑賞する活動に入らせようと考えた。このことによってより Emotional な鑑賞が可能となると考える。

7. シーンの目標

・音楽にとって一番重要なこととは何かを感じ取り、お互いにより豊か（感覚的：Emotional）に楽曲を捉えることができる。

8. シーン7の援助構想および本時にいたるまでの生徒の学び

時	学習内容	生徒の学びの姿	学びを開く教師の援助	かわりの視点・ねらい （評価・留意点等）	本時にいたるまでの生徒の学び （詳細は資料プリント参照）
2	<p>＊これまでの振り返り</p> <p>＊楽譜（五線譜）の理解</p> <p>＊楽譜の創作</p>	<p>＊1学期の「音楽とは何か」にむけての取組、2学期の音楽発表会での「合唱」発表に向けての取組を終えて、今までの学習を振り返る。</p> <p>＊「楽譜（五線譜）」はなぜ生まれたかを考える。 ＊五線譜がなかったらどのようにして楽曲を保存したか、を考える。</p> <p>＊簡単な曲を五線譜以外の方法で表してみる。 ・各自が表したもので他の生徒が演奏できるか、実際に試みる。</p>	<p>＊これまでの学習の復習として次のことごとらについて確認する。 ・音楽とは「表現」するための1つの手段であり、音楽をすることは目的ではない。 ・音や音楽は感覚、感情、イメージ、様々なものを表現できる可能性をもっている。</p> <p>＊楽譜の誕生から五線譜にいたるまでのおおまかな歴史的な流れを話し、楽譜への興味を高める。</p> <p>＊五線譜以外の形で楽曲を残すことがいかに困難かを感じ取らせ、五線譜がいかに完成されたもの（万能なもの）かを実感させる。</p>	<p>＊当たり前として使われている楽譜（五線譜）に焦点をあて、「楽譜」の意味や価値を追求させる。</p>	<p>・「私と音楽」プリントとまとめの中の「音楽で表現できること」についてのまとめを見ながら、1、2学期に行ってきた学習について振り返る。特に2学期の音楽発表会に向けての取組を次の2点から振り返る。 ①合唱によって何を伝える（表現する）ことができたか。 ②他の合唱から何が伝わったか。 →まとめのプリント参照 ・合唱表現に欠かせない楽譜（五線譜）はどのような経緯で生まれたかを理解する。 ・五線譜以外の方法で曲を表してみる。 ・表したものを発表しあい、他の人の楽譜が何という曲かを当てる。 →作品例参照</p>

1	<p>*五線譜で表せること、表せないことを追求</p>	<p>*五線譜で表せるものと表せないものを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各自の意見を発表しあう。 ・感情、感覚などは五線譜では表すことができないことを理解する。 <p>*「楽譜（五線譜）には音楽に一番重要なもの以外すべて用意されている。」と言うことに関して意見交換を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音楽にとって一番重要なものとは何かを意見交換する。 	<p>*五線譜は本当に完成させたもの、万能なものなのかを問い、五線譜で表せないものがあることを理解させる。</p> <p>*五線譜は感覚、感情、気分、雰囲気といった人が音楽表現をしていく上で不可欠なものを表すことができないことを理解させる。</p> <p>*楽譜に書かれていないことを感じ取ったり、表現したりすることが人が音楽をする上で最も大切なことであることを理解させる。</p>	<p>*音楽にとって一番重要なことは、楽譜に書かれていないことを感じ取ったり、表現したりすることなのだ、ということを実感させながら、より豊かに楽曲を捉える姿勢を育てる。</p> <p>・五線譜以外で表された楽譜（図形楽譜）などを参考にしながら、なぜ作曲家は五線譜を使わなかったかなど、を考える。</p> <p>・「楽譜（五線譜）には音楽に一番重要なもの以外すべて用意されている。」ということについて考えながら、楽譜に必要なこと、楽譜に表すことができないことについて考える。</p> <p>→まとめのプリント参照</p>
1 本時	<p>*楽曲の裏に潜む感情や感覚、イメージを探る。（より豊かな鑑賞活動）</p>	<p>*様々なタイプの楽曲を聴いてそれぞれの楽曲に潜むことがらについて意見交換を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然を表現した楽曲、無機質なものを表現した楽曲、感情を表現した楽曲を聴き、感じ取ったこと等について発表する。 	<p>*それぞれの楽曲に潜むものを感じ取るためには頭ではなく心から素直にしかもお互いが感覚を研ぎ澄ませながら聴けるように援助を図る。</p> <p>*様々なタイプの楽曲を提示しながら、より感覚的な鑑賞ができるように随時援助を図る。</p>	<p>*楽曲の裏に潜むもの（楽譜に表すことのできない感覚や感情、イメージなど）を感じ取りながら、お互いにより豊かな（感覚的な）楽曲の捉えをすることができる。</p>

9. 本時の学習（4／4）

(1) 本時授業における学びを開く構想

従来の鑑賞の授業では1つの主題に1～2曲を主教材とし、その楽曲に関する要素に焦点を当て、様々な角度からその楽曲を深く鑑賞させていく場合が多かった。しかし、この学習ではその楽曲に対して深い理解や感じ取りができたとしても、他の楽曲や音楽にそのことを応用することはできない。すなわち、その場限りの学習で終わってしまう。これでは生徒の学びは開かれることはない。言うなれば「閉じた学び」を育てる鑑賞活動の姿である。

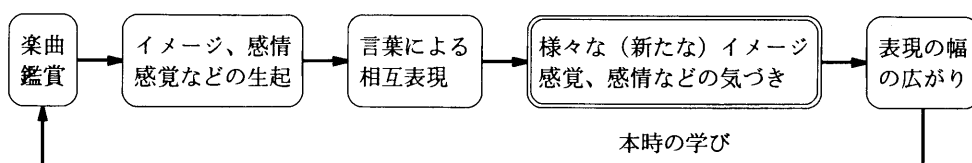
そこで、本時では今まで行ってきた「音楽にとって一番重要なこと」に焦点を当て、ある楽曲を深く解釈するという視点ではなく、楽曲のもつ「楽譜に表すことの出来ないもの」に焦点をあて、様々なタイプの楽曲を鑑賞する活動を取り入れた。この学習では楽曲そのものが鑑賞の対象（目的）ではなく、楽曲を聴くことによって生じる感覚や感情、イメージが学習の対象となる。

本時で取り上げた楽曲は、自然を表現したもの（＝実生活の中で体感できるものを表した楽曲）、無機質なものを表現したもの（＝実生活では体感できないが、想像によって体感できるものを表した楽曲）、感情を表現したもの（＝実生活の中で実際に体感できる感覚や感情を表

した楽曲)である。これらの楽曲によって生徒の中には様々な感情、感覚、イメージ等が生起すると考える。そして、それらをお互いが言葉に換え表現することによって、「さまざまな感覚、感情、イメージへの気づき」が起き、その「気づき」によって「表現」の幅も広がっていくと考える。

ここで展開される学習は、従来のようにその場限りで終わる鑑賞学習とは違い、生徒の中に生涯息づき、生徒の学びは開かれたものになると考える。

このように本時は、鑑賞活動における学びを開く学習の1つのスタイルとして提案したいと考える。



(2) ねらい

- ・楽曲の裏に潜むもの(楽譜に表すことのできない感覚や感情、イメージなど)を感じ取りながら、お互いにより豊かな(感覚的な)楽曲の捉えをすることができる。

(3) 展開

分	学習内容	生徒と学びの姿	学びを開く教師の援助	かかわりの視点・ねらい (評価・留意点等)
5	<ul style="list-style-type: none"> ・前時までの復習 ・課題把握 	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽をする上で大切なことは何だったか思い起こす。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 様々なタイプの楽曲を聴いてその裏に潜むものをお互いに追求しながら、感じ取ろう。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・楽譜には書き表せないものを感じ取ったり、表現したりすることこそ最も重要な部分であったことを確認する。 ・それぞれの楽曲に潜むものを感じ取るためには頭ではなく心から素直に、しかもお互いが感覚を研ぎ澄ましなが聴くことが重要であることをアドバイスする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時までの学習を明確に思い起こすことができる。
40	<ul style="list-style-type: none"> ・課題追求 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽曲ごとに提示される課題について感じ取りながら次の楽曲の鑑賞を行う。 ・以下の楽曲を聴き、課題ごとに感じ取ったことを発表しあう。 <p><自然を表現した楽曲></p> <p>(1)「夜明け」(ラベル) (ダフニスとクロエ第2組曲)</p> <p>「日の出」(グロフェ) (組曲グランドキャニオン)</p> <p><ある絵画を表現した楽曲></p> <p>(2)「こびと」(ムスルグスキー) (組曲「展覧会の絵」)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・作曲者が曲に込めた思いや感情(楽譜に書き表せなかったこと)を感じ取ってできるだけ様々な言葉で表してみよう、と働きかける。 ・自然を表現した楽曲、無機質なものを表現した楽曲、感情を表現した楽曲を提示し、以下のような点について感じ取ったこと等について発表させる。 <p>(1)深い森と大峡谷の夜明け</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どんな夜明けを表しているのか ・作曲者は何を感じているか。 <p>(2)グロテスクな絵</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どんな絵を表しているのか。 ・この絵を見た作曲者はなにを感じたのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの課題について集中して取り組み、その楽曲の裏に潜むものを真剣に追求しようとしているか。 ・それぞれの課題追求の場でより感覚的な鑑賞が可能となるように随時アドバイスをを行う。 ・感じ取ったことを発表しあう場では常に受容的な雰囲気を作る。 (一人一人が感じ取ったことはすべてが正しい。それは他の人と違うかも知れないが、それを勇気をもって言葉で表現してみよう、と働きかける。)

		<感情を表現した楽曲> (3)「ジークフリート牧歌」 (ワーグナー) (4)「オーゼの死」 (組曲ペールギュント) (グリーグ) (5)「アダージェット」 交響曲第5番4楽章(マラー) (6)「悲愴」 交響曲第6番1楽章(チャイコフスキー)	(3)～(6) ・誕生の喜び、死の悲しみ、愛の喜び、絶望の苦しみ悲しみなどそのぞれ異なる感情を表現した曲。どんな気持ちを表しているのか。 ・(3)(5)の「喜び」(4)(6)の「悲しみ」、それぞれ異なる感情をどのように言葉で表したらよいか考えさせる。	
5	・まとめ	・今日の授業の感想などを学習プリントにまとめる。	・自分なりに感覚を研ぎ澄ましながらか集中し、活動に取り組めたか自己評価させる。 ・この授業で学ぶことができたことなどを含め、感想をまとめさせる。	・お互いの意見交換を参考にしながら、より感覚的に楽曲を捉えることができた。

[池田芳幸]

Ⅳ 実践の検討と考察

1. アクトの構想

前章事例1～3に見られるように、実践では、第1学年に対するアクト「私と音楽」の各シーンが下表のように変容していった。

アクト1「私と音楽」		
シーン：事例1（4月）→	シーン：事例2（5月）→	シーン：事例3（1月）→
1 声で表現しよう！（音楽表現って何？）	1 音楽って何？（ウォーミングアップ）	1 音楽って何？①（ウォーミングアップ）
2 身近にある音楽を形作るもの（音楽って何？）	2 音楽の不思議①「数と音楽」	2 音楽の不思議①「数と音楽」
3 音楽をつくろう！（様々な表現）	3 音楽の不思議②「自然と音楽」	3 音楽の不思議②「自然と音楽」
4 日本のまわりにある音楽（価値観を広げよう）	4 音楽の不思議③「感覚（イメージ）と音楽」	4 音楽の不思議③「感覚（イメージ）と音楽」
5 音楽の可能性（表現を広げよう！）	5 声と音楽	5 声と音楽
	6 言葉、詩と音楽	6 表現と音楽①「歌（合唱）と音楽」
	7 表現と音楽①「歌（合唱）と音楽」	7 音楽って何？②「音楽にとって大切なもの」
	8 表現と音楽②「表現の可能性」	8 音楽って何？③「様々な音楽～音楽表現のもつ意味」
	9 自分と音楽（1年生のまとめ）	9 自分と音楽（1年生のまとめ）

2. 「アクト」のねらい

実践で提示されたアクト「私と音楽」のねらいは、次のようなものとなっている。

「自分自身と音楽とのかかわりを意識化（再認識）することによって、様々な音楽のもつよさや素晴らしさを感じ取ったり、「音楽」や「表現」について多角的なアプローチを試みることによって、音楽とのかかわりを更に深めたり、広げたりすることができる。」

すでに述べたように、授業においては、学習者と音楽とのかかわりが基底に存在する。自分の周囲にある音や音楽の存在に気づき、そうした音や音楽の意味を学習を通して意識化し、自分にとっての音楽のイミを自己の内に再構築していくことにある。こうした考え方は、先に述べた「音楽という文化が自分や人間にとってどのように位置付けられているかを知り、それが生きていく上でどのような意味や価値を持つのかわかっていく」といった授業観に基づいている。従って、授業では、学習者自らが音楽に対して主体的に働きかけるようなテーマの設定や工夫が必要となる。具体的な手法として、「音楽」や「表現」についての様々な面からのアプローチ（多角的アプローチ、ここでは「自然と音楽」「声と音楽」「言葉、詩と音楽」など）を試みるものである。

3. 「シーン」のねらい

アクトの持つねらいは各シーンのねらいを性格づける。事例1のシーン1「声で表現しよう」では、誰でもが持つ「声」に焦点が当てられ、「声」を使った音楽とのかかわりを意識化し、様々なアプローチが試みられる。具体的には、「声のしくみの理解」「声による様々な表現」「身近にある声による表現の調査」などである。事例2のシーン4は、「音楽の不思議③感覚（イメージ）と音楽」と題され、「人間の感覚やイメージと音楽とのかかわりを再認識」する試みである。「音によって人間のもつイメージや感覚が変化し、様々な事象を音で表現できることを認識化することがねらいとなっている。そのために「どんな音がどんなイメージや感覚を持たせるのか」をいくつかの追求活動を設定しながら学習が進められている。事例3のシーン7は、「音楽って何？②音楽にとって大切なもの」と題されている。そこでは五線譜が注目され。その意味や価値が問い直される。「音楽で最も大切なもの（楽譜に書かれていないこと）について意識化」させ、鑑賞活動を充実させようとしている。具体的には、「五線譜の理解」「五線譜以外の方法での記録」「五線譜で表せるものと表せないものの追求」などの小テーマが設定されていく。

4. 「シーン」の学習内容と授業展開

事例1の「声で表現しよう」では、まず頭声発声にこだわらず、各自の歌いやすい声質を使いながら、自由な雰囲気の中で既習曲を歌う。声に注目することを通して、声の生理的な理解や声の状態（声域）について学習しながら、声をつかった様々な表現を「伝言ゲーム」や「声の調査活動」へと進展する。生徒は「自分自身の声のよさや特徴を振り返り」ながら「声の役割」についてまとめをする。

事例2では、「すべての音（音楽）は何らかのイメージ（感覚）を共通に私たちに与えるのか」といった問題について「どんな音がどんなイメージや感覚を持たせるのか」といった問いが発せられる。この問いにそって「たった1つの音で表現できる事象にはどんなものがあるか」「1つの音で表現できない事象をどうやったら表現できるか（対比する2つの事象の表現）」「3つ以上の対比する事象をどうやったら表現できるのか」「4つの対比するイメージや感覚を全員に伝えることができるか」といったテーマで学習が進んでいく。教師によるこうした投げかけの過程で

「音」と「イメージ」「感覚」について、また、他者への伝達について認識を深めていくことになる。

事例3は、五線譜についての学習から始まる。楽譜の歴史を振り返り、五線譜についての理解を深めたり、五線譜を使用しないで音楽を記録する作業を試みたりしながら、音楽を記録することや五線譜の利便性について学習する。そして「楽譜には音楽にとって一番重要であるもの以外はすべて用意されている」というマーラーの言説を核としながら、「五線譜で表せるものと表せないもの」について意見交換をしていく。こうした取り組みを経て、最終的には、自然、絵画、感情など様々な表現が内容となっている音楽を自分の感情と真摯に向かい合いながら聴いていくのである。

5. 「シーン」の性格と相互のつながり

すでに見てきたように、「アクト」「シーン」による授業の展開は、例えば「混声三部合唱」「大地讃頌」あるいは「三年生を送ろう」といった従来の題材及びそれによる授業の流れとは異なったものとなっている。そこには、常に学習者にとっての音楽の意味や価値を学習者の側から問い直すテーマが設けられている。また一つのシーン内における一つのテーマは次のテーマを生み出す母体となり、大きく膨らんでいく性格を持っている。このことは、シーンとシーンとの関係においても同様である。

事例3に見られたように、シーン1（音楽って何？①）は、シーン2（音楽の不思議①「数と音楽」）につながり、シーン3（音楽の不思議②「自然と音楽」）を生み出し、シーン4（音楽の不思議③「感覚と音楽」）へと生成発展していく。

6. 「シーン」の変容

こうしたシーンの性格により、シーンは必然的に変容する。例えば、4月（事例1）の時点で年間5つのシーンに分けられていたアクトは、5月（事例2）には、9つに細分化されており、年を明けた1月には、そのうちのシーン6、7、8が再検討されている（前表参照）。日々の授業実践における結果が次の新たなシーンを導きだしていくわけである。このようなシーンの変容により当然次なるアクトも変化していく。

アクト、シーンのこうした動的な性格は、本実践では重要であり、授業構成上欠かすことのできないものとなっている。

V おわりに

本研究では音楽科の授業が「音楽という文化が自分や人間にとってどのように位置付けられているかを知り、それが生きていく上でどのような意味や価値を持つのかをわかっていくこと。そして、学習者が真の文化的実践者として成長していくことを願うもの」であるといった授業観のもとに、「アクト」「シーン」といった新たな授業構成の原理を提示しながら、期待する音楽科の姿を具体的な授業実践を通して模索してきた。本論により多少なりともその形が明らかになってきたと考える。本論で示した内容は、1年間の経過であるが、今後、この実践をさらに継続し、次年度へと結び付ける中で、シーンとシーン、アクト相互の関係を具体的に例示検討しながら課題にせまっていきたい。

〔伊野義博〕

注

- 1) 小論はすでに発表された「音楽科授業構成のあり方を探る～「かかわり」の視点からの提案～」(『教育論究 第38号』新潟大学教育学部附属幼稚園・附属長岡小・中学校 平成10年 pp.15-31)に続くものである。
- 2) 文部省『新しい学力観に立つ音楽科の学習指導の創造』教育芸術社 1993年 pp.54-56
- 3) 文部省『中学校音楽指導資料 学習指導の評価と改善』教育芸術社 1993年 p.58
- 4) 詳細は、前掲注1論文を参照されたい。
- 5) 平成10年に改訂された中学校学習指導要領においては「3年間を通して1種類以上の和楽器を用いること」といった表記が見られる。こうした例をはじめ、多様な音楽の扱いも重視されるようになってきている。
- 6) 前掲注1、pp.19-20
- 7) 文部省『小学校音楽指導資料 新しい学力観に立つ音楽科の授業の工夫』1995年 教育芸術社 pp.25-27
- 8) 1999年度新潟大学教育人間科学部附属長岡中学校における1年間の実践である。なお、事例1～3は、授業の実際をできるだけ忠実に記録するため実践された学習援助案(学習指導案)をそのまま掲載した。(授業者:池田芳幸)